京

乙未春

見返れは通た森や飛ほたる　貨僕
ぬれ紙の付て葉になる桜かな　梅通
鳥一羽とる気も出さて鳴子曳　芹舎
菜の色の時雨て青し壬生あたり　太老
折る頃の過てあるなり藪の梅　萬籟
霞む夜の挑灯重う見えに鳧　萬丈
行かけの見え〳〵ふりぬ月の雨　黙池
冬かれや釣提てある魚片身　南渓
おそろしくなるやうかるゝ猫のかけ　呉明
焚ほこり膳につきけり十夜講　朝陽
なるゝまて手の組にくき紙子かな　蒼虬
黄鳥や客より路地へ先廻り　一楼

仮名翁

雲水

乙未春

蕣や花をかこふて葉のふへる　美伶
吹ふりの跡何もなし閑子とり　薺居
隅々はまた夜のいろやかきつはた　常岐雄
明家見に入て痩蚊に喰れけり　礪山
花見よといはぬはかりや橋の反り　西馬
何事もなく栝にけり花すゝき　蕾白
最一里にしてこからしの山路かな　米牙
春の雨かはくたけつゝ降て居る　素因
かける日の一筋さすや秋の山　雨什
明星は朧はなるゝ光りかな　可大
かたよせてからもほつほと蚊遣哉　旦齋
さつはりと勝手寐させて薬喰　壽堂
噂する人の顔出す榾火かな　庚年
藁干て手遠にしたり石蕗の花　椿海
水仙や走りは剪て後のはな　桐堂
根をおして聞たはかりやくすり喰　荷了
折る枝のおもふ通りやきくの花　瓶山
手間かけて伐て呉けり一重けし　岱年
植た人息才て居るやなきかな　一楼

仮名翁

⑧ 人々に再遊の期を約す

人々に再遊の期を約す　菊也
海を見にこの爐にふたの出来ぬうち　抱儀
たつ鷺のたちまち見えすくれの雪　一具
戸障子は幾重ありても寒哉　雲山
半分は汐にひかるゝ落葉哉　壽堂
棹竹の霜おしぬくふ雫かな　有華
雪の中何度も来ませ若いうち　稱室
着たらは手紙おこせよ雪の空　卓郎
いふことの俄に寒きわかれかな
今やとて草鞋の紐引しむる
菊也に酒すゝめなとするに別れの
おしさに老かくりこともうち添て
はてしなきを日も闌し日も短しと
傍の人々の申まゝに
徳利のつもるを雪の出しほ哉　大梅

天保乙未霜月中の九日

⑨ 新年摺

見しらねとさすかに門の御慶かな　台岭
雪わけて若菜に春をおしへけり　芝山
四五人てひと撮みある齊かな　悦女
水筋の日和動かす柳かな　樗仙
治まりし代のゆたかさよ羽子の音　文康
福寿草さくや児猫のねむる脇　竹村
若水を川てすますやとまり船　菊雄

天保十二辛丑のとし